

DRAWING KYOTO 京都の未来を描く



スペシャルインタビュー

歴史に学び、未来を見据え、わたしたちはどう歩むのか

「膨張し続ける社会はもはやありえない」

1999年に策定した「京都市基本構想」は、日本の社会をこう指摘している。

当時、起草委員長として自ら構想を執筆した鷺田清一さんは、

25年の時を経て、未来の京都に何を思うのか。

哲学者・京都市立芸術大学名誉教授 **鷺田清一** さん

起草当時、基本構想に込められた想い

最大の特徴は、主語を「わたしたち京都市民」としたこと。市民が主役であることを一番大切にし、お役所の号令ではなく、市民の市政への参画を本気で進めていくことが重要で、絶対に疎かにしてはならないと考えました。結果的に他にはない基本構想となったと思います。他都市で紹介すると驚かれるんですよ。

京都市では、2026年以降の総合計画についての議論を2024年度から本格的に開始する予定です。議論の内容等は情報発信してまいります

京都が大切にしてきたこと、今後も大切にしていきたいこと

やはり「文化」を軸としたまちだと思えます。京都の課題、そして社会的な課題にどう取り組むかを考えるときに、京都が育んできた長い歴史の中にいつもヒントがあります。1200年にわたって、どんな災害や戦役があろうがずっと衰えることなく都市運営を続けてきた歴史の中で、政治や経済を含めて広い意味での「文化」から学び、資源として、常に新しいことに挑戦していくまちであり続けることがキー。例えば京都芸大の崇仁地域への移転は、明治維新で京都が衰退の危機にあった時代に日本で最初に64の番組小学校をつくった英断と同じように、必ず未来に生きてきます。

京都市民や京都に関わる人に向けて期待すること

25年前と比較して社会課題が多様化する中で、京都に住む人もそうでない人も含め、京都に関わる多様な人が一緒になってまちづくりを考えていけたらいいですね。京都は“人”がいてこそこのまちですから。

京都市基本構想

市民の6つの得意わざ

「めきき、たくみ、きわめ、こころみ、もてなし、しまつ」を市民の生き方として再確認し、くらしとまちづくりを描く

21世紀最初の四半世紀におけるグランドビジョン。「安らぎのあるくらし」「華やぎのあるまち」という目標と、「信頼」を基礎に社会の再構築を目指すというまちづくりの方針として、1999年に市会の議決を得て策定

これからの活躍を期待する、京都ゆかりの方々から、「未来」に向けたメッセージを頂きました

子どもたちがスポーツの素晴らしさを未来につないでいく京都を期待します。



女子プロテニス選手

加藤 未唯 さん Miyu KATO

2023年6月の全仏混合ダブルスで初優勝を飾る。「京都市スポーツ最高栄誉賞」2023年度受賞者

歴史や伝統文化を守り受け継ぎ、なおかつ、防災・防犯・医療等をはじめ最先端の技術を取り入れることのできる、正真正銘『今を生きる古者』となることを願っております。

作家

天花寺 さやか さん Sayaka TENGEIJI

小説投稿サイト「エブリスタ」で発表した「京都しんぶつ幻想記」が好評で、同作品を加筆・改題した『京都府警あやかし課の事件簿』でデビュー。第7回「京都本大賞」を受賞



ものづくりや職人がカッコよく美しいものであると発信し続けられる未来を作りたい。



西陣織デザイナー

前田 雄亮 さん Yusuke MAEDA

西陣織帯地を使用した、日常に取り込める洋服ブランド「N's1182」を大学在学中に立ち上げ、学生主体の地域課題解決事業「The Future of KYOTO AWARD」2022年大賞受賞者

生きものや自然についてもっと知り、もっと考え、人と生きものが共に生きる世界へ。



中学生

吉武 諒人 さん Ryoto YOSHITAKE

生きものを守るため、「生き物共存大作戦」をテーマに、現状や環境問題を知ってもらう活動を実施。環境保全に貢献した人に贈られる「京都環境賞」2022年度大賞受賞者。個人での大賞受賞は初の快挙

